



第二期 上勝町ゼロ・ウェイストタウン計画

We make enjoyable our lives with zero waste

2022年 3月策定

*Zero Waste
Kamikatsu*



目次

はじめに	3
序 章：ゼロ・ウェイストタウン計画とは	4
1 これまでのゼロ・ウェイスト政策評価	5
2 新たなゼロ・ウェイスト宣言	5
3 本計画書の位置づけ	7
1 章：仕組みづくり	8
1 ゼロ・ウェイストな暮らしを定着させる仕組み	9
2 経済が循環する仕組み	12
3 上勝マインドの継承者を育成する仕組み	16
2 章：コミュニケーション戦略	18
1 住民とゼロ・ウェイストの関係を良好にする	19
2 世界からの参画を促進するコミュニケーション	27
3 章：計画の全体像	30

はじめに

日本で初めてゼロ・ウェイストを宣言した自治体として、上勝町はこの17年間、2020年を目標年と掲げて、未来の子供たちにきれいな空気やおいしい水、豊かな大地を継承するため、ごみをゼロにする取り組みを展開してきた。

現在では45種類にも及ぶ徹底した分別は、約80%のリサイクル率を達成し、町内で排出されるごみの多くがリサイクルされる仕組みが出来上がった。住民主体の分別の取り組みは国内外で高く評価され、平成30年にブラジルで開催されたゼロ・ウェイスト都市会議ではスモールシティ部門で最優秀賞を、令和3年には総務省が選ぶふるさとづくり大賞において、ゼロ・ウェイストによる地域活性化が評価され、最優秀賞（内閣総理大臣賞）を受賞。ゼロ・ウェイストの理念を体現する形で建築した上勝町ゼロ・ウェイストセンターも、日本建築学会賞（作品）などを受賞した。

また、新型コロナウイルス感染症が拡大する以前は、様々な国からメディアが訪れ、視察が相次いでおり、その影響からか、上勝町に環境問題に対する「答え」や「未来への可能性」を期待し、それを体験しようとしてやってくる人も増加傾向にある。

一方、町内においては、なぜゼロ・ウェイストを推し進めるのかについて広く協議・共有されないまま世代が交代し、仕組みだけが継続された状況にある。加えて、少子高齢化が進み、人口全体が減少傾向にある中で、ごみ・資源の一拠点回収や多品目分別は、町民に負担を強いるものになってきた。

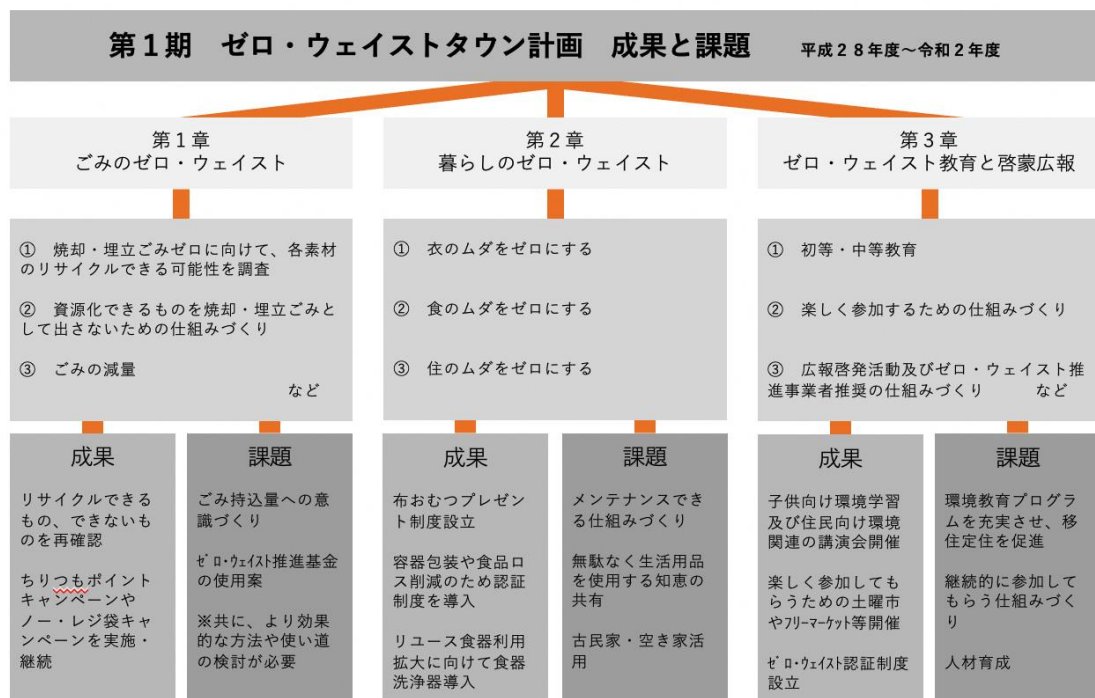
2020年を迎え、様々な問題を抱える中で、上勝町はこれからの10年、いやもっと先の100年後、何を目標に据えるのか。今一度「上勝町にとって、ゼロ・ウェイストとは何か？」について考え、自分たちなりの答えと目標を設定し、歩いていくべき時が来た。

私たちが夢みるのは、皆が心地よく暮らせる社会を、ゼロ・ウェイストという手段を持って実現すること。上勝町だからできる実験を繰り返し、町内・外を含めて「可能性」をキーワードに、人々を繋いでいく。

約20年間で先人たちが築き上げてきたものを土台とし、無駄にすることなく、私たちの世代では夢を乗せて、後世に引き継ぐ準備をしていく。

序 章：ゼロ・ウェイストタウン計画とは

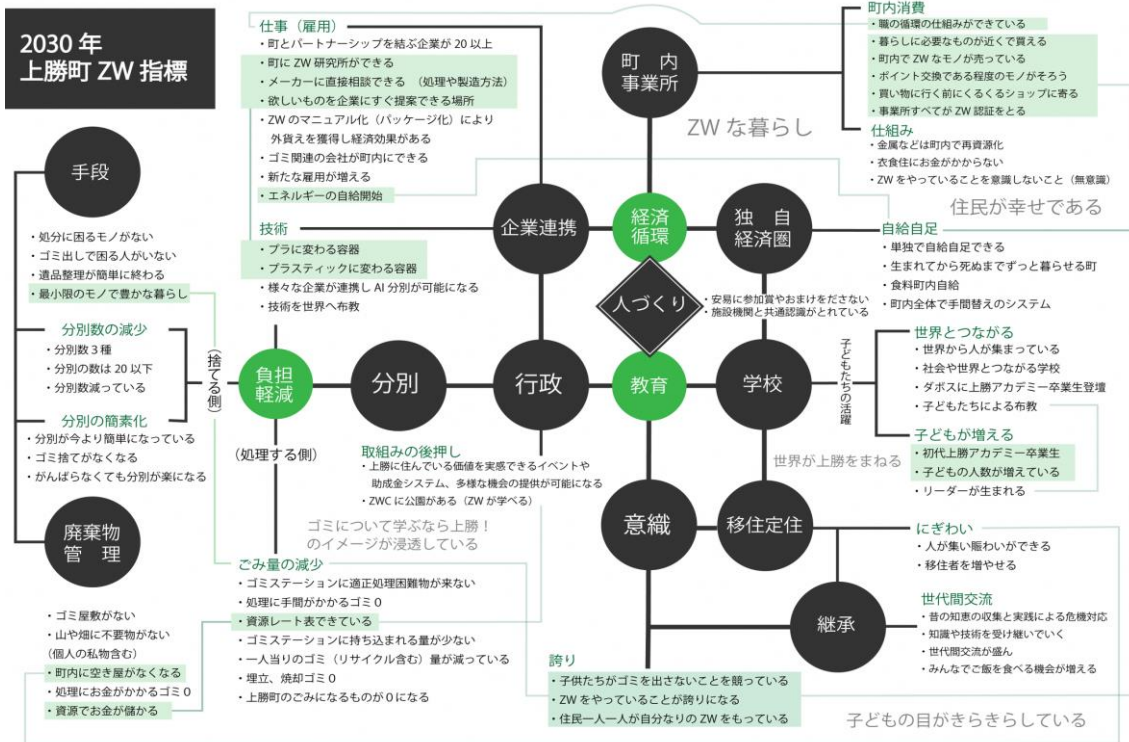
1 これまでのゼロ・ウェイスト政策評価



2 新たなゼロ・ウェイスト宣言

2020年5月に上勝町ゼロ・ウェイスト推進員会にてゼロ・ウェイスト宣言に関する協議が始まった。ゼロ・ウェイスト推進員とは、上勝町から委嘱を受けて活動する廃棄物減量等推進員（廃棄物処理法第5条の8）のことである。現在7名（2022年3月）のメンバーで構成されており、町内事業所の代表や運搬支援員、ゴミステーション管理補助員、元NPO法人ゼロ・ウェイストアカデミー事務局長、子育て支援団体代表などが務めている。主な活動内容としては、町民の環境行政に対する意見・要望等の町への連絡のほか、事業所に対するごみ減量や資源化促進に関する指導・助言、ゼロ・ウェイスト推進に係る町の施策作製に協力するとともに、実際に施策を実行する主体としても機能する。その他、上勝町内でのゼロ・ウェイストの普及啓発も活動内容に含まれている。この推進員会にて、新しい宣言を発表するか否かについて町と共に協議し、2030年を目標とする新たな宣言を定め、発表することを決めた。

現状の課題に対する解決策について議論する中で、今後の注力分野を明確にした。その過程を下図に示す。この整理のプロセスを経て、町民の負担軽減を図ること、経済循環を生み出すこと、教育を通して人づくりを行うことの3つの柱が見えてきた。特に人づくりに関しては、推進員が共通して強く認識する課題であった。



そして、前述の3つの柱を新たなゼロ・ウェイスト宣言の各項目として設定し、宣言の前身にこれまでの17年間の経緯を示した文言を加えて、2030年を目標としたゼロ・ウェイスト宣言が完成した。2020年12月18日の上勝町議会にて満場一致で承認された。

◆ ゼロ・ウェイスト宣言 ◆

2030年のゼロ・ウェイスト宣言から17年、上勝町では町民一人一人がごみ削減に努めリサイクル率80%以上を達成しました。小さな町の大きな挑戦は世界から注目され、持続可能な社会への道筋を示しました。私たちが目指すのは、豊かな自然とともに、誰もが幸せを感じながら、それぞれの夢を叶えられるまちです。上勝町はゼロ・ウェイストの先駆者として、「未来のこどもたちの暮らし環境を自分の事として考え、行動できる人づくり」を2030年までの重点目標に掲げ、再びゼロ・ウェイストを宣言します。

1. ゼロ・ウェイストで、私たちの暮らしを豊かにします。

- ゴミ出しに困る人のサポート体制を整える ————— 物理的
- ゼロ・ウェイスト投資(起業家へ) ————— 経済的
- ZWポイントを充実し、お得に暮らすシステムを作る ————— 精神的

・カネ、ヒト、コネ、情報すべてが集まる(わくわくする町)

・財団をつくる?

・ゼロ・ウェイストを楽しむ

・ちりつもポイントを地域通貨にする

・住民だからこそ受けられるサービス

・リデュースに対する評価制度(チャレンジ大賞)

・量り売りとしェアエコノミー

・ドローン、スマホアプリ

・リデュースのスターターセット(ロゴ入り)

(町内で使える、気に入ったら購入できる)

2. 町のできるあらゆる実験やチャレンジを行い、ごみになるものをゼロにします。

- ゼロ・ウェイスト環境問題に取り組む企業、大学と研究所をつくり、世界のごみ問題を解決する
- 企業連携による埋立・焼却ごみゼロ
- リデュースが広がる仕組みづくり

・教育機関などをつくる(サステナブル)

3. ゼロ・ウェイストや環境問題について学べる仕組みをつくり、新しい時代のリーダーを輩出します。

- 世界のごみ問題を解決する人材を輩出する
- ゼロ・ウェイストを学べるサロンをつくる(年齢問わず)
- 年代ごとの学習プログラム作成

・学びを発信する仕組みづくり

・受け入れた修学旅行生へのプレゼン

・生徒の視察対応

・ZW留学

・関心のない人へのアプローチ

・小中学生への環境教育

新しく承認されたゼロ・ウェイスト宣言

3 本計画書の位置づけ

前項の新たなゼロ・ウェイスト宣言を実行し、2030年に向けて実現していくための行動計画として、本計画書「第2期 上勝町ゼロ・ウェイストタウン計画」が存在する。

本計画書の前進に当たる「上勝町ゼロ・ウェイストタウン計画」（2016年策定）は、前ゼロ・ウェイスト宣言に紐づき、持続可能で美しい未来を創るための第一歩として「ゼロ・ウェイストタウン上勝」を形成するべく、中長期的な視点で方針をまとめたもので、2020年を目標年として作成された。内容としては、「上勝町リサイクルタウン計画」

（1994年策定）を評価し、その達成状況を確認するとともに、当時の目標について、時代の変化による必要性や改善点を再検討するなどして作成されたこともあり、主に廃棄物における「ごみゼロ」を目指すものであった。同時に「理想の暮らし・ライフスタイル」を提案するまちづくり構想の土台となることを目指したものであった。

本計画書を作成するために5つのプロジェクトを組成し、現状調査、町内外の声を集約するためのワークショップ、次年度以降の実行を見据えたプロトタイピングを実施した。各プロジェクトの取り組みの詳細は調査報告書に記載している。5つのプロジェクトに対応する形で、本計画書の枠組みは3つの仕組みづくり（1章）と2つのコミュニケーション戦略（2章）から構成される。それぞれの実施内容と推進員会で設定された3つの柱の関係性を下図で示す。5つのプロジェクトそれぞれに取り組んでいくことで、3つの柱を5つの観点から同時多発的に取り組むことができ、実現可能性を高めていくこと目指す。

		1章 仕組みづくり			2章 コミュニケーション戦略	
		1 ゼロ・ウェイストな暮らしを定着させる仕組み	2 経済が循環する仕組み	3 上勝マインドの継承者を育成する仕組み	1 住民とゼロ・ウェイストの関係を良好にする	2 世界からの参画を促進する
3つの柱	町民の負担軽減	上勝町に暮らす誰もがゼロ・ウェイストな暮らしを実施できる状態をつくる	ゼロ・ウェイストを通じて経済循環を生み出すことで、人々の暮らしを豊かにする	上勝町が直面する課題に向き合い、中長期的に一緒に考え、携わる仲間を育てる	町民が抱えている課題を理解した上で、適切な負担軽減策を立案、実行する	世界中からの参加者と一纏めに、町民負担と環境負荷を両立する方法を模索する
	経済循環	ゼロ・ウェイストな暮らしを通じて町内外で経済循環を起こす	町内・町外の事業所と連携して、経済循環を生み出し、持続させる	産官学が連携することによって、経済循環の質と量を高める	経済循環によってもたらされた価値を住民に感じてもらえるように伝える	世界中からコミュニティへの参画者を募ることで連携先の可能性を広げる
	教育	上勝町に受け継がれるゼロ・ウェイストな文化を継承する	新たなアイデアを生み出し実現するノウハウを蓄積し、町内外の人に伝えていく	上勝町が積み上げてきたゼロ・ウェイストに対するマインドを継承する人材を輩出する	ゼロ・ウェイストに取り組む意義を住民に積極的に伝え、語り合う	上勝町でゼロ・ウェイストについて世界中の人と学び考える場をつくる

本計画書の1章と2章では、5つのプロジェクトで調査やワークショップ、プロトタイピングを実施した結果を踏まえ、何をどのように、どこが主体となって取り組んでいくか計画を示す。3章では、1・2章で示した計画を時間軸で整理し直し、各年に取り組むことを明確化した。

1章：仕組みづくり

分類の紹介



ゼロ・ウェイストな取り組みの6分類



現状の取り組みを6つに分類するワークショップの結果

※カード：上勝町内の取り組み、黄付箋：上勝町外の取り組み、赤付箋：仕組み化へのヒントとなるキーワード

「ゼロ・ウェイストマップ」を作成するためには、まず町民の暮らしについて具体的に調査し、仕組み化していく上で重要なポイントやボトルネックを明らかにする。また、仕組み化する上で町民の交流の場の検討及び提供が1つの鍵になると考えられる。文化を継承していくためには、町内での移住者と町民の関係構築、また子供から高齢者までの幅広い世代間交流の場のあり方を模索するとともにそれらの場の継続的な提供を目指す必要がある。

-実施計画-

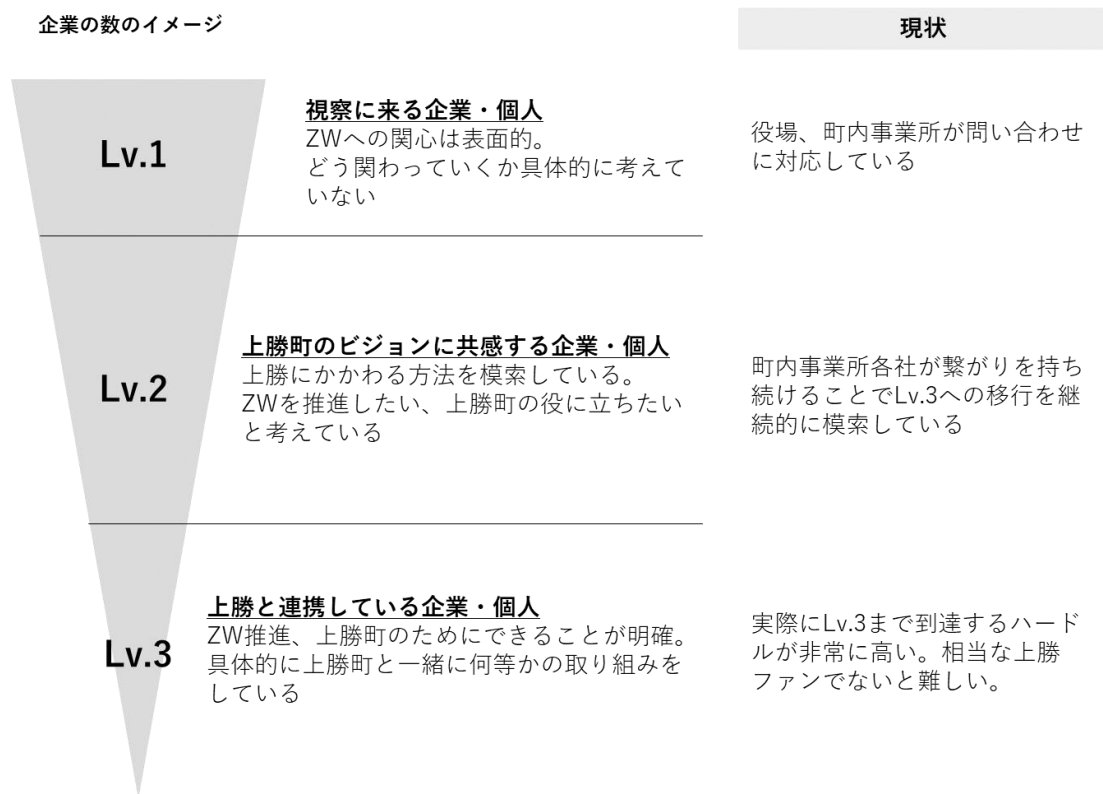
実行主体	内容
委託先事業所	町民の暮らしに関する調査 仕組み化における提案作成
上勝町役場 委託先事業所	町民の交流の場の検討及び提供

スケジュール	達成目標
令和4年度	1-1-1 上勝町のゼロ・ウェイストマップ作成とツール化 1-1-2 町民の暮らしに関する調査
令和5年度	1-1-3 具体的な仕組みや機会の検討及び提案
令和6年度	1-1-4 提案内容の運用開始
令和7年度～	1-1-5 継続的な運用及び評価調査 1-1-6 改善案の提案

2 経済が循環する仕組み

「ごみゼロ」に留まらず、ゼロ・ウェイストによる暮らしの豊かさを目指す「**ゼロ・ウェイスト コラボレーション・デザインセンター**」（仮称、以下 ZW-CDC）を設立する。

ゼロ・ウェイストを起点とした企業連携の可能性は示唆されてきたものの、これまでは企業連携が個社に閉じており、行政や町民、複数の町内事業所が関わる仕組みになっていなかった。また、約 2,000 名にも及ぶ視察者が年間で訪れているものの具体的な企業連携にまで発展するコラボレーションの数は限られてきた。そこで新たに設置する「ZW-CDC」は、コラボレーションを促進する定期的なワークショップの開催と企業連携プロジェクトの推進を担う。



現状の課題のイメージ：Lv.2、Lv.3 まで到達するハードルが高い

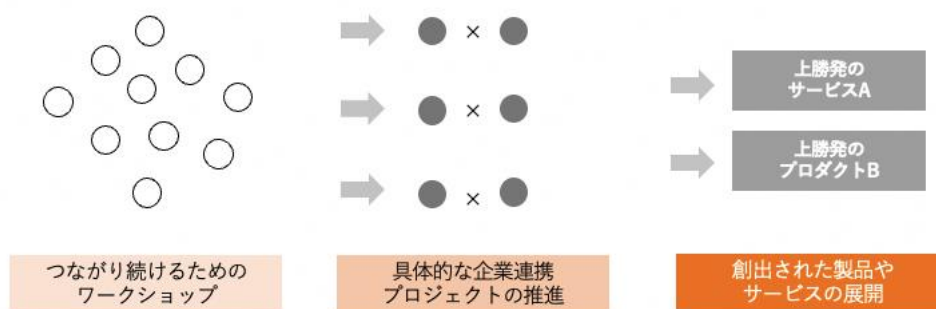
「ZW-CDC」の目的や体制のイメージを以下に示す。町内・町外との連携を上勝町役場と共に促進していくことを目指す。

ゼロ・ウェイスト コラボレーション デザインセンター（仮）

目的：ゼロ・ウェイストで、人々の暮らしを豊かにするために町内外のコラボレーションを活性化する

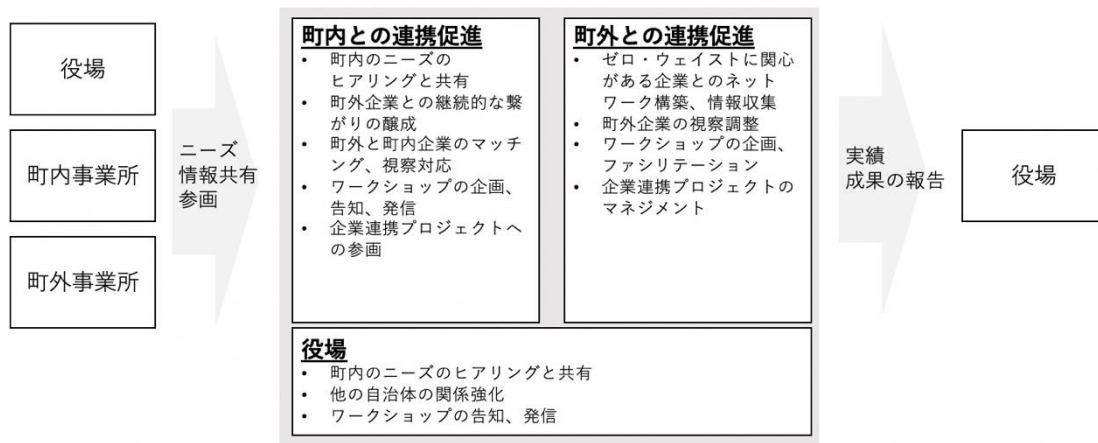
役割

- 町内外でゼロ・ウェイストに関心がある人を対象としたワークショップの定期開催
- 企業連携プロジェクトの起ち上げ、マネジメント
- プロジェクトを通じて創出された製品やサービスの展開



体制

ゼロ・ウェイスト コラボレーション デザインセンター（仮）



すでにデザインセンターの活動のパイロットプロジェクトとして、複数の取り組みが進んでいる。ここでは、一部を紹介する。（詳細は調査報告書参照）

三井化学×いろどり：新しいプラスチックの可能性模索するプロジェクト



左：ビジョン WS にて展示 右：取り組みについて紹介する八木氏、佐々木氏、栗飯原氏

参加者	三井化学株式会社（八木氏、佐々木氏）株式会社いろどり（栗飯原氏）ゼロ・ウェイスト政策研究（鈴木氏）ゼロ・ウェイストタウン計画経済循環プロジェクト（松本、赤木）
連携のきっかけ	2021年7月、三井化学のオープン・ラボラトリー活動「そざいの魅力ラボ-MOLp®-」による素材の展示会に鈴木氏と赤木が参加し、GoTouchのコンセプトに共感し連携について相談 展示会リリース： https://jp.mitsuichemicals.com/jp/release/2021/2021_0628.htm GoTouch： https://jp.mitsuichemicals.com/jp/molp/work/38.htm
目的	環境に悪い点ばかりがフォーカスされるプラスチックの新たな可能性を模索する三井化学と上勝町のゼロ・ウェイストがコラボレーションし、いろどりを知ってもらうきっかけ、葉っぱで生活に彩をもたらす場の拡大を目指す。
進捗状況	2021年11月に八木氏が上勝町を訪れ、ビジョン・ワークショップの場でGoTouchやSlow playなど、これまで取り組んできたことを紹介した。紹介されたものは現在もポールスターに展示されており、顧客からの声を集めている。 また、スタビオの技術を使って、葉っぱを植物由来の樹脂の中に封じ込める実験をいろどりと三井化学が行っている。試作品が順次出来上がっており、今後はデザイナーも混じえ商品化に向けて、コンセプトや発信方法、販売経路などについて話し合っていく予定。

愛知県食品企業×ポールスター：ゆこうを使った新しい食品の開発



左：試作品のゆこう焼き菓子 右：町内視察の様子

<p>参加者</p>	<p>アルファフードスタッフ（浅井氏）、長良園（市川氏）、ホリデーズ（落合氏）、合同会社 RDND（花本氏）、ゼロ・ウェイストタウン計画経済循環プロジェクト（松本、赤木）</p>
<p>連携のきっかけ</p>	<p>環境と資源について考えオーガニック食品を取り扱う愛知県の食品企業の取り組みについて赤木が知り、2021年11月に花本氏と松本と共に上勝視察ツアーを企画、実施した。</p>
<p>目的</p>	<p>これまで活用方法が限られていた上勝町のゆこうの可能性を見だし、オーガニック食品の知見をもとにした新たなお菓子を開発する</p>
<p>進捗状況</p>	<p>2021年11月に3社の経営層が上勝町視察ツアーに参加し、坂東食品、ペルトナーレをはじめ、上勝町内で食に関する事業を展開する事業者を訪問した。その際にゆこう農家と議論を交わす機会があり、ゆこうの可能性を見だした。2021年12月に長良園がお菓子の試作品を作成。改良を加えた上で、販売を目指す。</p>

-実施計画-

実行主体	内容
上勝町役場	ZW-CDC との協力体制の構築
委託先事業所→ZW-CDC に引き継ぎ	町内外のゼロ・ウェイストに関心がある人たちが継続して上勝町の課題解決に携わるワークショップの定期開催および実績の共有
委託先事業所→ZW-CDC に引き継ぎ	企業連携プロジェクトのマネジメントおよび成果の可視化

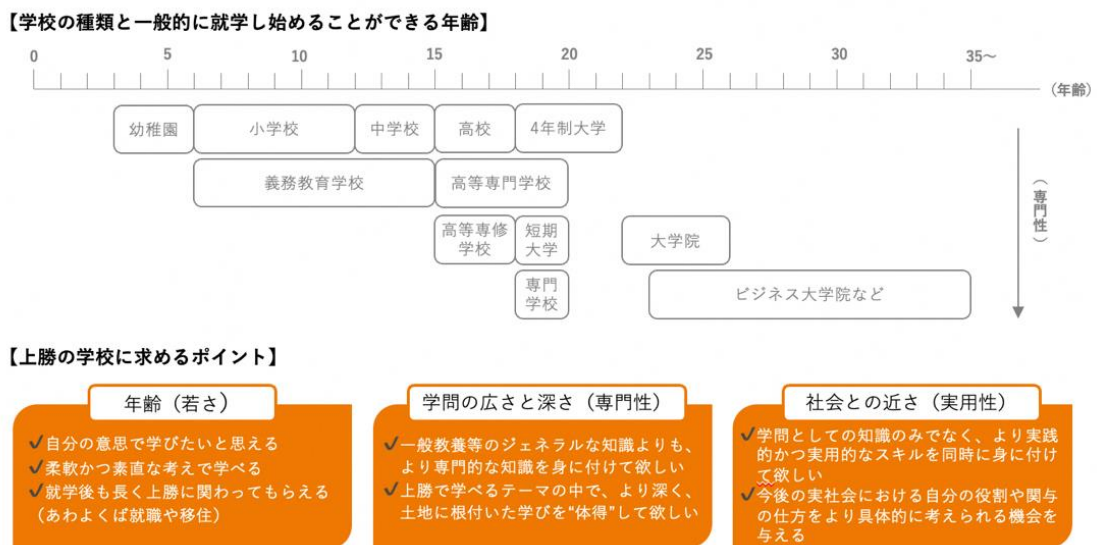
スケジュール	達成目標
令和4年度～令和7年度（毎年）	1-2-1 ワークショップの実施（3ヶ月に1回程度） 1-2-2 上勝町役場へ実績報告（1年に1回）
令和5年度～令和6年度	1-2-3 ZW-CDC 設立準備
令和6年度	1-2-4 ZW-CDC 設立

3 上勝マインドの継承者を育成する仕組み

長期的に上勝マインドを持つ人材を育て、将来的な後継者を増やしていけるような仕組みとして「学校づくり」を進める。

「人づくり」に関する推進員会でのディスカッション及び現存の学校のリサーチ等をもとに、上勝町における教育機関の素案を作成した（詳細は調査報告書参照）。ゼロ・ウェィストの考え方を軸に、サステナブルな生き方や考え方を科学的・文化的・社会的な視点から専門的かつ実践的に“上勝で”学べる機関として、専門学校を想定することも一案だと考えられる。

学校の分類と上勝の学校に求めるポイント

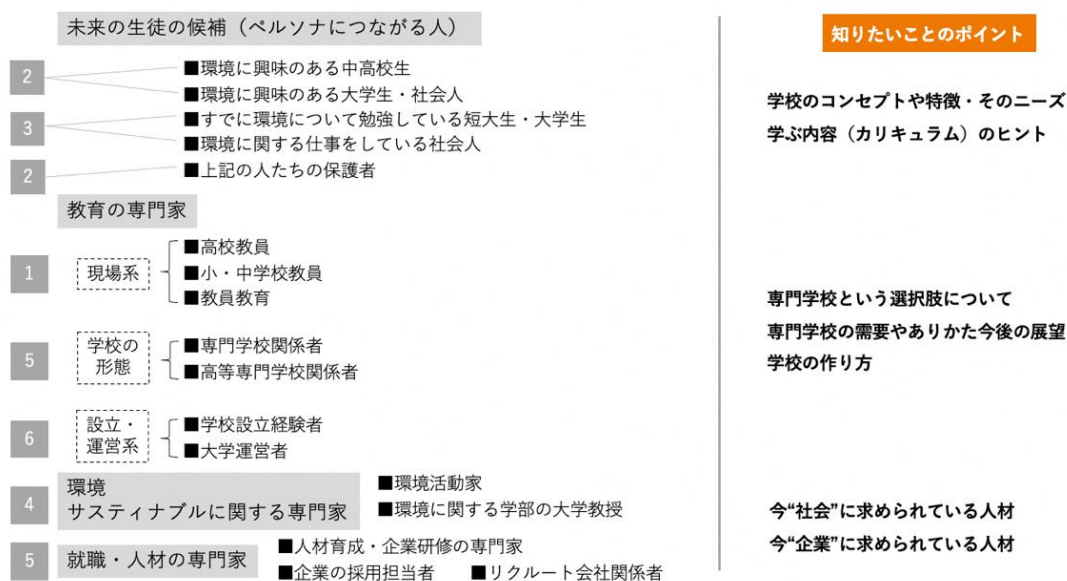


ディスカッションやリサーチの結果のまとめ

まずは、学校づくりを具体的に進めていくための準備委員会の設立を目指す。準備委員会では、学校づくりに関わる人たちを対象としたインタビュー調査と、既存の町内事業所との連携に取り組む。

教育機関の新設にあたり協力やアドバイスが必要となる人物や、実際の設立後のステークホルダーとなり得る人物（像）などを洗い出し、下図のインタビュー調査の計画を作成した。より広い知見を得て、また環境に関する教育や学びに関するニーズや課題などを深く知るために各関係者にインタビューを実施する。

インタビュー対象者案・順番・知りたいことのポイント



インタビュー計画（イメージ）

また、調査を通して、学校がアクティブラーニングの場となっていく必要性が明らかになってきた。上勝町内では既にアクティブラーニングの機会が町内で提供されているので、これらの取り組みとの連携も検討していく。カリキュラムや講師陣など、上勝というフィールドを使ったアクティブラーニングのコンテンツをどうするかは課題として上がってくると想定される。そのため、民間の事業所ベースで市場のニーズや上勝町内の価値発掘などを先に試して、学校づくりの過程から企業や研究所などを巻き込むことで、上勝なりの学校の在り方を模索していく。

-実施計画-

実行主体	内容
委託先事業所	インタビュー調査の実施・報告
上勝町役場	準備委員会の設立
準備委員会	教育機関設立に向けた検討会の実施および意思決定

スケジュール	達成目標
令和4年度	1-3-1 準備委員会を設立
	1-3-2 教育機関素案のディスカッションを開始
	1-3-3 町内民間事業者との連携模索
令和5年度	1-3-4 コンセプト策定
	1-3-5 教員・カリキュラムの検討
	1-3-6 予算設定および資金確保の開始
	1-3-7 施設（校舎）や宿舍の検討及び確保開始
令和6年度	1-3-8 教員・カリキュラム詳細の決定
令和7年度	1-3-9 教育機関設立準備

2章：コミュニケーション戦略

1 住民とゼロ・ウェイストの関係を良好にする

コミュニケーション

少子高齢化の進行に伴い、上勝町のゼロ・ウェイスト施策についても住民の負担軽減が喫緊の課題として挙げられている。住民とゼロ・ウェイストの関係を良好にするコミュニケーション戦略を立案するために、まずは町民へのインタビューやヒアリングを実施した結果を述べる。その後、抽出された課題をどのような優先順位でどこが主体となって進めるか具体的な計画を示す。

1-1. 町民とゼロ・ウェイストの関係

町民がゼロ・ウェイストに対してどのような課題感を持っているかを明らかにするためにゼロ・ウェイストに対する意識の高さと世帯種別に 6 名を対象に実施したインタビューの結果を示す。インタビューの結果、下記のこと明らかになった。

① ゼロ・ウェイストに対する意識の高さによる課題の違い

ゼロ・ウェイストに対する意識が高い町民は共通して、楽しみながら暮らしを豊かにする手段としてゼロ・ウェイストを取り入れている。一方で、あまり意識されていない場合は、ゼロ・ウェイストとはごみゼロのことであり、細かくごみを分別することを面倒だと感じる傾向にある。

したがって、ゼロ・ウェイストの意識の高さは、環境問題などへの意識の高さではなく、暮らしを豊かにする手段としてゼロ・ウェイストを活用する意識の高さと紐づいていることが考えられる。これまで、ごみと密接に繋がってきたゼロ・ウェイスト施策に暮らしの観点を取り入れ発信することで、より多くの方が楽しみながらゼロ・ウェイストに携わっていけるのではないかと推測される。

② 世帯種別の課題の違い

単身世帯は、ごみとプライバシーの問題が関連している。出すごみ全てが出しに行った本人のごみだという意識に直結しやすく、ごみの内容によって生活を知られること、また想像されてしまうことへの抵抗を少なからず感じている。

子育て世帯は、通勤の途中にゴミステーションに寄るなど、生活動線の中でごみを捨てられることで不便を感じにくい。決められた日時にごみを捨てるよりも、好きなときにごみを捨てられる便利さが勝る。

高齢者世帯は、運転の可否によって課題が大きく変わる。運転ができなくなると誰かに依頼をしてごみを捨てることになり、その状況に申し訳なさを感じている。現状のゼロ・ウェイスト施策は、運転ができる前提の仕組みになっており、運転が困難な町民が負い目を感じることなく、上勝町で暮らすサポートやフォローを受けられることが求められる。

ゼロ・ウェイストに対する意識

		高い	高くない
世帯の種類	単身	ゼロ・ウェイストは暮らしを豊かにする手段	旬の食材
	子育て		素朴な暮らし
	高齢		自然美
			消費／購入時にごみを意識 (ごみの処理が面倒)
			買い物が不便で 選択の余地なし

加えて、上勝町の持続可能な廃棄物管理に関する人々の行動とコミュニティへの参加を促進する社会的要因と決定要因を調査することを目的にした京都大学大学院 地球環境学堂・地球環境学舎・三才学林の大学院生をサポートする形で「上勝町におけるごみ分別のアンケート」を実施した。その結果、上勝町においてはごみの分別は自治体のルールとして従っているという人が多く、環境意識が高いわけではないことがわかる。しかしながら、分別という行為が環境問題の解決への参加に繋がっていると認識している人が多いことから、分別してリサイクルするという仕組みがあることで、意識されていない人も環境問題の解決に結果的に参加できているという状況があることが伺える。このことから、分別等町民が自ら関わられる機会を継続する、もしくは新しい形で創出しつつ、負担軽減できる施策について検討が必要である。

1-2. 現状の課題の整理

住民とゼロ・ウェイストの関係を良好にするために、町民が抱える課題とそれに対する対応策について述べる。上勝町民7名を対象として現状の課題を聞いた結果と2016年に町内全世帯716世帯1,559名（うち393世帯、618名分を回収）を対象に花王が実施したアンケートの結果から48項目の課題を抽出し、6つの項目に分類した。またそれぞれの課題を抱えている対象者について明らかなもののみ記載している。グレーに網掛けされている項目は、ゴミステーションの課題であるため、本章での対象外とする。

分類	No.	課題	課題を抱えている人			
			花王 報告書より	年代	地区	家族構成
町民の意識 意識が高いとはどういう状態？今高い／低いのはだれか？まずは問題の具体化が必要。	1	町民が処理の楽さに気づいていない。				
	2	町民向けの環境問題教育をし直さないといけない。				
	3	人の意識の変革。紐解いていかないといけない。				
	4	意識の差がある。意識の低い人を上げる必要がある。				
	5	低満足度層ほどゼロウェイストの活動内容への理解が低い	●	50代・上勝町 外勤め		
	6	暮らし満足度が低い層ほど、ごみ削減の努力の成果が見えないことに不満を感じている	●			
	7	規則に従っているだけで、それ以上の意識はない。				
町民の現状 野焼き、高齢者、生ごみ、分別の負担が表面化している課題	8	ゴミの野焼きが多い。		高齢者		
	9	野焼き監視員として地元の警察と一緒に警鐘を鳴らしてもらう。		高齢者		
	10	ゴミの不法投棄。回収できるものは回収している状況。				
	11	高齢で体が不自由な人の家はゴミ屋敷。		80歳以上		
	13	80歳以上ではごみステーション、ごみステーション界隈の訪問頻度が激減する。	●	80歳以上	正木、傍示が以外	
	14	80歳以上女性は、ごみステーションに自力でアクセスできない人が45%と突出。	●	80歳以上女性		
	15	生ごみ処理が問題。集合住宅での匂い。高温高压で乾燥させる機械を導入してはどうか。		集合住宅に暮らす若い人		共稼ぎ
	16	レストランの生ごみは困っている。				事業者
	17	土日が分別と出しに行かないといけないから、休みがつぶれる。夕方遅くまで空いてたらいいとか。				共稼ぎ
	18	分別の負担が大きくて移住される。				
	12	「ごみステーションに行く」ことより「ごみの分別」のほうが面倒だと感じる人が多い。	●	60代以下の方が満足度低い	正木、傍示が比較的満足度高	
19	勝浦に持ってでる。（粗大ゴミが無料だからお互い様か？）					
上勝町の姿勢 上勝町として考えを発信し、行動で示していく必要がある	20	町の環境問題に取り組む姿勢が明確でない。				
	21	上勝町のゼロ・ウェイストの定義が不明確。				
	22	役場のゼロ・ウェイストに対する意識。				
	23	アンケートでかなりの手間を強いられているので、分かったこと、問題点、解決策を開示してほしい	●			
	24	役場から出るゴミの量が多い。				
	25	役場の中の研修が行き届いていない。（外部講師を呼ぶなど）				

ゴミステーションの運営 現場と町民のコミュニケーション、より個別化した対応、ゴミ処理の方法を検討していく必要がある	26	ゴミステーションの運営が現場に丸投げ。				
	27	現場の職員によってゴミの綺麗さの定義が違う。				
	28	プラなどの分別が作業員によって違う。	●			
	29	現場にごみを楽に洗浄できる設備があれば、持って帰らせたり、互いに嫌な気持ちになることがない。				
	30	現場と町民のコミュニケーションを円滑にする情報交換や共有が行われていない。 (粗大ゴミが来る前は役場に連絡して現場に連絡が行くとか)				
	31	満足度が高い人ほど町民や職員との会話頻度が高い。ゴミ捨てに掛かる時間は関係ない。	●			
	32	分別ができる人とできない人、しない人の対応は別に考えないといけない。				
	33	回収の方法を選択できるようにする(回収・持ち込み)。				
	34	出てきているゴミを町内で処理できていないし、それによる雇用も生まれていない。				
	35	営業時間を延ばしてほしい。終了時間が早すぎる。	●			
ゴミステーションの設備 新しいゴミステーション建設前のコメントのため取り直す必要あり？	36	民営化しないで自分たち町民の力で頑張りたい。大きな資本等は絶対入らないでほしい	●	50代・女性		
	37	知人と会った時、立ち話でなくゆっくり座ってお茶等しながら話せるところが欲しい。	●	60代・女性他		
	38	町内一の場所なので、図書館、民族博物館なる物が併設できれば良い。(文化継承)	●	70代		
	39	一斗缶等でチリ取りやペットボトルでもぐら様風車等をつくって頂いたことがあり良かった。(現場の人が現場でできる工夫)	●			
	40	くるくるショップが手狭になった。				
	41	リベアする場所がほしい。				
仕組み その他仕組の必要性(経済、教育、ゴミを減らす試み、法律対応、ゴミの処理)	42	粗大ゴミの回収場所が限られている。				
	43	経済と環境がうまく回るような仕組みができていない。				
	44	ポイント制はゴミを減らすのに貢献できていない。				
	45	教育、システムの不備について議論がされてこなかった。				
	46	ゴミを洗って出すなら汚濁防止法についても検討する必要がある。				
	47	災害時のゴミはどう処理されるのか。				
48	粗大ゴミの受け入れ日数を増やす、タイヤを受け付けてほしい	●				

2021年7月の推進委員会にて、これらの項目の優先順位を3段階(1.1年以内、2.5年以内、3.10年以内)で設定した。以下に分類ごとに設定した優先順位と、1年以内に実施することについて実行主体の中心となる上勝町役場と推進員が協議した内容について記述する。

【町民の意識への取り組み】

子ども向けには保育園、小学校、中学校向けに義務となっている項目もあるため相談しながら進めていけることについては、できるだけ計画策定だけでなく実行まで1年以内に取り組んでいく。大人向けの教育については、ゼロ・ウェイストアカデミーが過去に実施していたプログラム、ゼロ・ウェイストについて考えるワークショップやタウンミーティングなどを定期的に開催していくことが期待される。

また、広報戦略については対象を明確にして、その層に向けた呼びかけやコンテンツを検討することとし、これらについては上勝町役場が主体となって実施していく。

町民の意識への取り組み

1年以内に 取り組むこと	分類	取り組むこと
	戦略プランの立案	町民向け環境教育プランの策定 低満足層（50代・上勝町外勤め）も想定した広報戦略の立案
10年以内に 取り組むこと	10年後に達成したいこと	町民が処理が楽なことに気づく
		町民の意識の変革。変化を経年で評価していく
		町民の意識の差を、関心がない人の意識を高める形で埋めていく
		規則に従っているだけでなく、町民が環境に対する意識を持っている

【町民の現状】

ごみの分別負担軽減、高齢者の課題、生ごみの対応ができない住宅調査については、推進員会でチームを組み、町民の負担を軽減する方法を包括的に考えていく。

町民の現状

1年以内に 取り組むこと	分類	取り組むこと	解決策案
	戦略・プランの立案	ごみの分別負担軽減策を立案する	試しに月一度遅くまで開けてみる等
	調査の実施	高齢者の課題をごみを起点に明らかにした上で、対策を立てて実行してみる	
		生ごみの処理問題。対応が必要な住宅を調査する	ゴミステーションで専門家にたい肥化してもらう
5年以内に 取り組むこと	戦略・プランの立案	事業者の生ごみ処理方法の再検討	回収の事業者を設ける

【上勝町の姿勢】

評価基準を策定の上で、役場を含む事業所の現状を調査する。評価基準としては、3R 事業所の定義、エコアクションの基準などがあるため、推進員会と検討し、評価を行う。

上勝町の姿勢

1年以内に 取り組むこと	分類	取り組むこと
	戦略・プランの立案	ゼロ・ウェイストを定義付ける
	調査の実施	事業所（役場含む）の現状を調査する

5年以内に 取り組むこと	戦略・プランの立案	事業所（役場含む）のリデュース目標と課題対応の方針をつくる
	事業の実施	ゼロ・ウェイストの定義を発信する

【ゴミステーションの運営】

分別ができる人／できない人／しない人など対象者別の対応策を設定していく。その際に、回収拠点を複数設置することも検討する。

ゴミステーションの運営

1年以内に 取り組むこと	分類	取り組むこと
	ルール化	現場のごみ処理、運営方法のルールと基準を決める（ごみの綺麗さ、プラの分別、洗浄など）

5年以内に 取り組むこと	戦略・プランの立案	回収拠点をつくることを検討
	戦略・プランの立案	分別ができる人／できない人／しない人など対象者別の対応策の実行開始

10年以内に 取り組むこと	企業連携	企業連携を通じて町内のごみに価値を生む 雇用を生む
	10年後に達成したいこと	町民がゴミステーションに行くことが楽しいと思っている （会話量によって満足度が変わるか実験など）

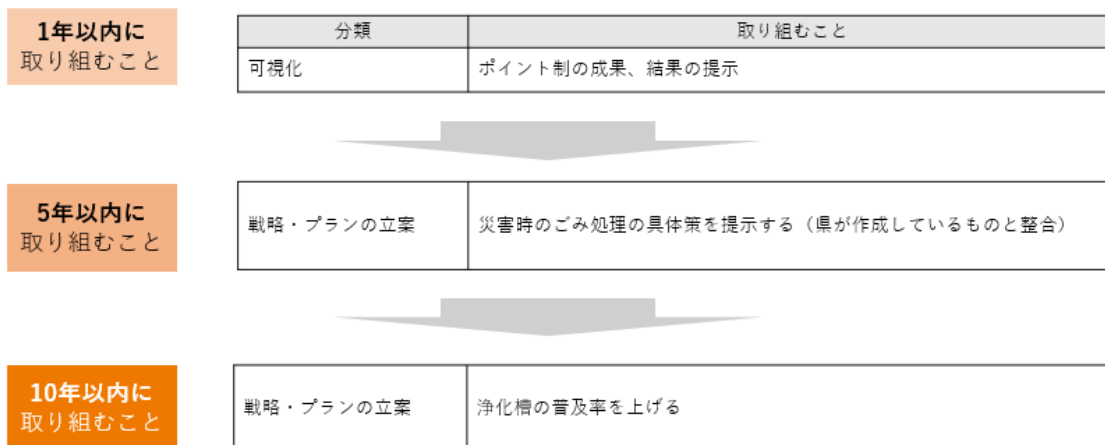
【その他の仕組み】

ちりつもポイントの結果提示はすぐにも対応可能。さらにポイント制を充実させていきたい。ちりつもポイントの対象を拡大し、生分解性の農業資材や農機具の利用、健康、出役、景観整備など、町のためにしてくれたことに対して付与することも検討する。不正のな

いポイントの付与について、上勝町役場が主体となり推進員会と検討していく。

災害時の対応としては、ごみの仮置き場が必要である。ゴミステーションへの道が寸断されたときの対応も含め検討していく必要がある。また、浄化槽の普及率は現状 30%程度のため、今後高めていくことが求められる。これらについても上勝町役場が主体となり取り組んでいく。

その他の仕組み



全体を通じて、ゼロ・ウェイストに関連する評価方法を明確にし、住民やふるさと納税をしてくれた人たちに公表していく必要性について議論した。ゼロ・ウェイストに取り組んでいないことを責められるのではなく、気づいたらゼロ・ウェイストな暮らしを実現できるような施策が期待される。

-実施計画-

実行主体	内容
上勝町役場	<ul style="list-style-type: none"> ・ 町民向けのゼロ・ウェイスト学習プログラムの策定 ・ 町民向け対象者別広報戦略の立案と実行 ・ 事業所の廃棄物の状態調査と評価基準の設定 ・ 回収拠点設置の検討 ・ 災害時のゴミステーションの対応検討 ・ 浄化槽の普及率向上 ・ ごみの分別負担軽減策の立案と実行（高齢者の課題、生ごみの対応ができていない住宅の調査等）

スケジュール	達成目標
令和4年度 (1年以内)	<p>【町民の意識】</p> <p>2-1-1 町民向けの環境教育プランの策定開始</p> <p>【町民の現状】</p> <p>2-1-2a ごみの分別負担軽減策を検討・立案</p> <p>2-1-2b 高齢者の課題をごみを起点に明らかにした上で、対策を立てて実行する（試行錯誤を重ねる）</p> <p>2-1-2c 生ごみの処理問題。対応が必要な住宅調査</p> <p>【上勝町の姿勢】</p> <p>2-1-3 ゼロ・ウェイストの定義付け</p> <p>2-1-4 事業所のごみの現状調査</p> <p>【ゴミステーションの運営】</p> <p>2-1-5 ゴミステーションの分別ルールや基準の明確化</p> <p>【その他の仕組み】</p> <p>2-1-6 ポイント制の成果・結果の提示</p>
令和5年度	<p>【町民の意識】</p> <p>2-1-7 対象者別広報戦略の計画策定開始</p> <p>【ゴミステーションの運営】</p> <p>2-1-8 回収拠点を作ることを検討</p>
令和9年度 (5年以内)	<p>【町民の現状】</p> <p>2-1-9 事業所の生ごみ処理方法再検討</p> <p>2-1-10 事業所のリデュース目標と課題解決の方針作成</p> <p>2-1-11 ゼロ・ウェイストの定義を発信</p> <p>【ゴミステーションの運営】</p> <p>2-1-12 対象者別対応策の実行開始</p> <p>【その他の仕組み】</p> <p>2-1-13 災害時のごみ処理の具体策を提示</p>
それ以降 (10年以内)	<p>【町民の意識】</p> <p>2-1-14 町民の意識変革と意識の差の是正</p> <p>【ゴミステーションの運営】</p> <p>事業所のリデュース目標と課題解決の方針作成</p> <p>2-1-15 企業連携を通じて町内のごみに価値を生む雇用を生む</p> <p>2-1-16 ゴミステーションに行くことが楽しい状態の実現</p> <p>【その他の仕組み】</p> <p>2-1-17 浄化槽の普及率の向上</p>

2 世界からの参画を促進するコミュニケーション

上勝に世界からのさまざまなステークホルダーの参画を促進するために「コミュニティ・マーケティング」を推進する。

既存の情報発信方法の課題として、マスマーケティングの限界が指摘されていることから、SNSを活用した「コミュニティ・マーケティング」を推進する。コミュニティ・マーケティングとは、「熱量と顧客ロイヤリティが高い層がコアファンとなり、形成されたコミュニティを通してスケールさせていく手法」である。上勝が主体となるコミュニティについて検討する中で設定した「コミュニティの定義」「コミュニティの3つの要素」「目的」「背景」「実施手法」「KPI」「メリット・デメリット」「ポイント」「実施事項」を以下の図で示す。

コミュニティの定義	人々が志を同じくする価値観や興味を共有し、何かとのつながりや帰属を感じる空間(*1)。	
コミュニティの3つの要素	親切的意識	コミュニティの人々は互いにつながり、部外者とは異なるという本質的な理解(*2)。
	儀式と伝統	コミュニティの文化と意味を固める特定の行為と行動(*1)。
	義務感	コミュニティメンバーが互いに奉仕するように駆り立てる道徳的義務感(*1)。
目的	コミュニティを形成し、コミュニティに参加している人同士を結びつけることで、参加者同士がつながり合い、ロイヤリティを高める。それにより、LTV（顧客障害価値）の向上を目指す。	
背景	マスマーケティングの限界	サービスを消費者が理解するための媒体として、ウェブサイトとSNSがテレビの1.6倍の影響を持つように。
	ソーシャルメディアの発達	サービス利用につながるのは、知人・友人といった一般的な消費者による、ソーシャルメディア上の投稿がトップ。
実施手法	オンラインコミュニティ	コミュニティサイトや小規模なSNSのようなプラットフォーム上で、顧客同士の結びつきを促す。
	リアルイベント	実際に顔を合わせたコミュニケーションで、顧客同士、顧客と運営者の親密度を向上させる。
KPI	参加者からの内部/外部への情報発信数	
メリット デメリット	メリット	参加者からの直接的なフィードバックをもらうことができる。また、口コミが発生しやすい土壌を構築することができる。 金銭コストが、他のマーケティング手法に比べてかからない。
	デメリット	参加者との関係構築を誤ると、ロイヤリティが下がる結果になる。また、関係構築にも時間がかかる。
ポイント	運営スタンス	コミュニティ運営担当者はあくまでサポート役。指針のみを構築し、自主的な成長につなげる。
	目的設定	参加者が参加する意義を持てるような、目的を設定する。この目的は、社会的な問題と接続する。
	初期メンバー	コミュニティ参加意識やモチベーションを高められるような、コミュニティを牽引してくれるリーダー気質の人を初期メンバーとする。
	オフ/オンラインの使い分け	コミュニティ内で共通の認識や伝統を醸成するための、オフライン上のイベントを実施する。

実施事項	What	「参加者に対して何を提供できるのか」「コミュニティの運営によって何を得たいのか」の設計を行う。
	Who	初期メンバーと、フォロワーそれぞれのペルソナを決める。そして、初期メンバーのあたりをつける。
	Where	コミュニティを運営するオンライン上の場所を決める。また、オフラインで活動する場合はどこで行うかを定める。そしてこの場所は、whoで決めたペルソナに影響を受ける。ティーンであればsnapchatかもしれない。
	Why	なぜコミュニティの運営を行うのかを、改めて検討する。
	When	いつ頃、どの程度の規模感にしていくのかの設計を行う。
	How	どのように運営を行っていくかの指針の設計を行う。

(*1) https://www.jstor.org/stable/10.1086/319618?seq=1#metadata_info_tab_contents,

(*2) <https://blog.hubspot.jp/community-marketing>

上記の検討項目を踏まえて、効果的なコミュニティ・マーケティングの実現に向けて推進する。また、既存の取り組みとして上勝町公式 YouTube チャンネル「ゼロ・ウェイスチャンネル」が存在し、ゼロ・ウェイストに関心のある人々と「共に学ぶ」というスタンスで発信されている。既存チャンネルとの連携も模索しながら、実際にコミュニティを組織し参画を促す仕組みをつくっていく。まずは、広報・コミュニティ運営に係る人材の獲得もしくは養成から始める必要がある。

-実施計画-

実行主体	内容
上勝町役場	ゼロ・ウェイスト専属広報担当設置検討 (ゼロ・ウェイスト推進員、地域おこし協力隊、地域おこし企業人等) 記者会見実施

スケジュール	達成目標
令和4年度	2-2-1 Facebook や Slack など小規模でのプロトタイプをスタート
令和5年度	2-2-2 コミュニティとしての運営を本格的に開始。上勝町への発信と浸透、町外への発信を実施
令和6年度	2-2-3 コミュニティメンバーが固定され、ゼロ・ウェイスト専属広報担当設置完了 公式広報としてプレスリリースなどを担当しつつ、町内外発信を担う
令和7年度	2-2-4 広報の成果をはかり、戦略について協議 成果により広報担当の増員や予算についても見直しを図る

3章：計画の全体像

終章：2025年に向けて

着実、に。

今回の計画書策定に至る調査やディスカッションなどを通して、**上勝町のゼロ・ウェイストの取り組みの根底には、人々の意識や自然環境との関わり、人の営みがある**ことが見えてきた。そのため、今後は単に「ごみゼロ」を目指すものではなく、上勝町の伝統や文化などを守る手法である点を軸として、仕組みづくりやコミュニティづくりを計画していくことが必要とされる。自分たちなりの新しい指標を据えつつ、課題点として上がっている住民の負担軽減や経済の循環を生み出すことについて、上勝町が目指す姿を明確に町内外に対して示す必要があり、その過程においては町民のみならず、町外からの協力者を得ながら協議していく必要性を確認している。

指標づくりと記述したとおり、ごみゼロを目指すことだけが上勝町のゼロ・ウェイストではないとすれば、今後上勝町として宣言の内容を含めつつ、**何を指標としてゼロ・ウェイストタウンを作るのかについて、議論することが重要である。**

誰もが「ごみゼロ」は無理だ、と言った時代に、先人たちは自分たちで決断し、実行した。これら歴史から学ぶ「自分たちで考え、決める」という姿勢を保ちつつ、目指す先を明確化していくため、町民との対話の場や調査などの機会は計画策定以降も設けていかななくてはならない。

上勝町はこれから、暮らしをベースに考えつつも、資源や資金が循環し、持続可能な町を作るモデル地域になることを目指す。これまで「ごみゼロ」を目指した町だからこそその知見や知識を基にしつつ、次世代へと繋ぐ可能性を世界に対して示せるように実験を繰り返す。これが上勝町の2030年、またそれ以降に向けて目指す姿である。